雪の降る寒い日

三毛さん

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

「片羽の妖精」ラリー・フォルク。

彼の相棒であり、敵であった男。

１９９５年、４月。

ベルカ公国はウステイオ共和国に眠る地下資源を口実に、周辺諸国へ向けて宣戦を布告した。ベルカ戦争と言われる戦いの幕開けである。

その戦争の最中に生まれた、畏怖と敬意の狭間を生きる一人の傭兵パイロット。そんな彼には、〝片羽の妖精〟と呼ばれる相棒の姿があった。

「あれは、雪の降る寒い日だった」

こうして物語の幕は上がる。

彼の最も近いところにいて、今は最も遠いところにいる男の物語。

目　次

プロローグ ―― 1
1章：猟犬は鳴いている
砦の来訪者 ―― 3
凍山舞う、猟犬 ―― 6
飛び行くは円形の空 ―― 10
スティール・アライブ ―― 13
誰が為に鐘を鳴らす ―― 18
誰が為に鐘は鳴る ―― 24
2章：臨界への空路
地獄遍路 ―― 33
光線一閃（1） ―― 40

プロローグ

雪は降らないが、寒い日だった。
戦場に吹く風はいつも寒い。あの大空に比べたら、だが。
季節は過ぎて、手に握るものが操縦桿から銃に代わり、放たれるミサイルは小銃弾に変わった。
馬鹿でかい大陸戦争があった後、この国は自分の境目を見失っていた。かつて自分がいた小国を思い出してしまったものだから、やってきてしまったのだと思う。けれど今まさに引かれようとしている「境目」こそが、自分が今ここにいる意味なのだと実感している。あの頃から自分の意志は変わっちゃいない。自分の目で確かめたい。確かめるまで、この手に握るものを置くことはできないだろう。
機関銃の連射音が静まった頃、同じ義勇兵から声をかけられた。こんな埃だらけな戦場に、お客様なのだという。
「ラリー。お客だぞ」
「俺に？」
「お前を名指ししてきたぞ。オーシア放送局のなんとかっていう記者だそうだ。お前ってそんなに有名人か？」
オーシア。また懐かしい響きを持つ単語が駆け抜けた。
「さあね。そのお客様っていうのはどこに？」
「あっちだ。あの割れた家だよ。何を話すのか知らないが、せいぜい弾が飛んでこないことを祈るんだな」
砂で汚れたユークトバニア製の自動小銃[AK]を持って、件の彼に会った。
「オーシア放送局のブレッド・トンプソンです。貴方とは一度お会いしてみたかった」
戦場には綺麗すぎるピカピカのヘルメットと戦闘服、〝記者〟と書かれたテープを腕に巻いたトンプソンという記者は、これまた綺麗な手を差しだしてきた。
「義勇兵に会いたいなんて物好きもいるんだな」
素直に手を取った。

先ほどの仲間がパイプ椅子を持って来てくれたので、腰を降ろして話す余裕ができた。ＡＫを左に抱えて、浅く座った。
「それで、何を話す？戦場で弾が顔を掠めた話とか」
向かいに座る記者、トンプソンは前のめりになって答えた。
「貴方がエースパイロットだった頃の話を」
思わず顔を歪めてしまった。この記者はエースパイロットの話を聞きたいのだと言う。
「悪いが俺はそんな———」
「貴方のことは知っています。『片羽の妖精』と呼ばれ、翼を赤く塗ったパイロット。傭兵揃いのウスティオ空軍第６航空師団所属。そしてなりより、あの〝鬼神〟に最も近いところで飛んだ戦友であり、敵であった男。彼と飛んだ空で何を見て来たのか、それを貴方の口から聞きたいのです」
参った。よりによってあいつの事まで出てくるとは。思い出さずにはいられなくなった。いや、忘れたかったわけじゃない。俺の中の出来事として物語は完結している。その続きが無いだけだ。そう、あいつ。誰もが魅せられた、エースの生き様という物語。
「あいつか。ああ、知ってる」
遠くで銃声が鳴り始めた。
「話せば長い」
記者も、もう物語の世界に入り込んでしまっている。
「知ってるか？エースは３つに分けられる。強さを求める奴。プライドに生きる奴。戦況を読める奴。この３つだ。あいつは、確かにエースだった」
このエースの生き様。さて、どこから話してくれようか。
噛んだガムから、徐々に染み付いた燃料の香りがしてきた。
なら、ぴったりな幕開けの空からにしようじゃないか。
目を閉じれば現れる戦闘機。そして、大気を焦がすジェット音。
「あれは、雪の降る寒い日だった」

1章：猟犬は鳴いている

砦の来訪者

そう。あの雪の日が始まりだった。
最初の印象は・・・そうだな。筋は良かった。

1機の戦闘機が着陸する。
新入りがやってくるらしいと耳にして、俺は愛機の側で彼を出迎えた。
機体は青いパターンが入ったイーグル。俺と同じか。ということは他の奴らよりは死に難い奴であることには違いない。
一体どんな奴なんだろうか。こんなところに進んでくるなんて。金に困ったか、傭兵のくせに国を救おうと見上げた正義心を掲げて来たのか。口には出さないがここの傭兵パイロットは、いけいけなベルカを叩きのめしてやりたい気持ちに溢れている。国が負けたら食いぶちがないから、なんて裂けても言えない。
キャノピーが開いて顔が出てきた。何にも気移りしなさそうな顔だった。機体から降りても無言で指令室に向かっていく姿に先人たちはあまり面白くない。
「なあ、あいつどう思うよ」仲間の傭兵パイロットが声をかけてきた。
「飛んでみなきゃ分からん。行こうぜ」
仲間の肩をぽんと叩いて、新入りに付いて行く。
ヴァレー空軍基地所属、ウスティオ空軍第6航空師団は言わずと知れた傭兵パイロットで構成する部隊だ。辺境の基地に癖のある面子、初めて来たときは思わず高待遇だと皮肉を言ってしまった。だがここに来てもう1年と少し立つのだと思うと、それは新入りの一人も来るか。
軽い自己紹介がなされた。新入りはサイファーと言うらしい。もちろん本名じゃなく、彼がずっと使ってきたＴＡＣネームだ。
「早速だが、諸君らに緊急出撃命令だ」

俺と新入りを含めて８人がブリーフィングルームに集う。手狭な部屋が蒸し暑い。
いつの間にか俺たちは最後の砦なんていう大役を掴まされてしまったようだ。戦争が始まって１週間、この国はほぼ９割がベルカで埋め尽されている。ここが最後まで狙われなかったのは運が良かったのかベルカが間抜けなだけか。とにかくベルカはヴァレー空軍基地を落としてチェックメイトといきたいらしい。
「敵爆撃機編隊を撃破し、基地を守り抜け。断固として、ここでベルカの侵攻を食い止めるのだ」
司令官からはもう一つ発表があった。部隊編成だ。
３機編隊の小隊を２部隊、そして２機編隊の小隊を１部隊として組み分けることにしたらしい。計３個飛行小隊が臨時編成として飛び立つ。
「ラリー。お前はあの新入りとだ。コールサインはガルム。あいつがガルム１、お前がガルム２だ。良いな？」
「いきなり新入りと？」
「なんだ。何か不満か？」
「いや。その判断が正しいことを信じる」
トンネルのような独特な縦長のハンガーに俺たちの機体が揃っている。武装はフル装備。短距離と中距離。整備兵が駆けまわってミサイルを取りつけている。
一言よろしくと挨拶でもしようと思ったが、新入りは既に機体に乗り込んでいるらしかった。
「ちゃんと撃墜（おと）してこいよ。〝片羽〟」
「このミサイルがただの棒きれじゃなければだ」
「安心しろ。最高の状態だ」
そんな会話をして、俺も愛機に乗り込む。
牽引車でハンガー手前に機体を並べてから、エンジン始動。
右手の人差し指を上げて合図。エンジンマスタースイッチをオン。
コックピットコンソールの右側、赤いトグルスイッチを引っ張ってＪＦＳ（ジェットフューエルスターター）を作動させる。まずは右エンジンから。

エンジン回転計のスタートアップを確認。ウーと唸り声を上げてイーグルが目覚めていく。メインエンジンスタート。
中指も立てて指2本で合図。右エンジンのスイッチを上げる。右エンジン点火。イーグルのエアインテークが下向きに下がるのを確認。
同様の手順で左。ＪＦＳをオフ。イーグルの声が聞き慣れたターボファンエンジンの音に変わる。
テストスイッチで機体システムのチェック、全装備異常なし。ヘルメットを被る。
車輪止め外せのサイン。ミサイルに付いている外部安全ピンが引き抜かれる。発進準備は整った。
「ガルム隊は最後に離陸せよ」
正規軍たちが余らせていた戦闘機に跨る傭兵仲間が先に離陸して行く。俺たちの番だ。
滑走路の端でトリムとラダーのチェック。隣に並ぶ新入りの機体を確認し動作に問題がないことを確認。新入りもこちらの問題はないと手で伝えてくる。
「滑走路クリアだ。ガルム隊、離陸を許可する」
「ガルム1了解。クリアード・フォー・テイクオフ」
「ガルム2了解。テイクオフ」
スロットルレバーを前へ。アフターバーナー最大発進、地響きと空気を震わせて飛び立つ。
空は今にも雪が降り出しそうだった。

凍山舞う、猟犬

「降ってきたな」
　青空と雲が交互に入れ替わる上空。そこにいよいよ雪が降り出した。キャノピーに当たる雪が貼りついては消え、を繰り返す。現在高度６０００フィート。（約２０００メートル。）
『こちら基地司令部。全機あがったようだな』
　司令部の独特なだみ声が聞こえて来た。
『ガルム１、ガルム２、現在の方位を維持せよ』
「こちらガルム２、了解した」返答。
『方位３１５、ベルカ軍の爆撃機接近』
　現在進路３１５、イーグルのレーダーにはそろそろ映る頃あいだ。
「雪山でベイルアウトは悲惨だ。頼むぜ１番機」
　右斜め前方を飛ぶ新入り、サイファーに冗談めかして言う。もちろんスルーされた。
『各機、迎撃態勢をとれ』
「報酬はきっちり用意しとけ」
『互いが無事であればだ』
「お財布を握りしめて待ってろよ」
　サイファーと共にイーグルを加速させる。敵爆撃機全機撃墜、それ以外に道はない。
『ガルム２、お前はガルム１の指示に従え。作戦中の勝手な行動は禁ずる』
　信用ないね。と笑いそうになる。
「了解。指示は頼んだぜ、サイファー。あんたがガルム１だ」
　無言ながらに頷く気配が翼から感じられる。
　レーダーに反応。高速の目標２、戦闘機か。続いて低速目標が２。これが爆撃機だ。
　武装マスターアームスイッチをオン。全搭載武装の安全装置解除。攻撃開始。
　傭兵仲間の迎撃機が戦闘機と入り乱れ始めた。

「前方爆撃機２機。攻撃開始」
「ガルム２了解」
　ミサイル選択は中距離タイプ。射程に捉えた、ロックオン。
「ガルム２、フォックス３」
　イーグルの胴体からミサイルが放たれた。ガルム１もミサイルを放つ。
　敵戦闘機がこちらに気付いたが遅い、既に爆撃機は火の玉になって落ちて行く。撃墜。
「こちらガルム２、爆撃機を撃墜」
「ガルム１、確認した。こちらも撃墜」
『敵爆撃機、１機目と２機目撃墜確認。気を抜くな！』
　司令部も確認したようだ。
「良いぞ、ベルカだからってビビることはないぞ！」
「よしお前ら、さっさと片付けてホット・ラムとしゃれ込もう」
　仲間たちが盛り上がる。
　前方レーダー照射。左にブレイク。敵機が脇をすり抜けた。
「護衛機には構うな。爆撃機に集中する」
「ガルム２了解」
　敵機が旋回しきる前に加速して振り切る。遠くない距離に爆撃機が３機。さっきの戦闘機はこいつらの護衛のようだ。手薄になればこちらのもの。
　追いつかれる前に処理したい。距離が近いから短射程のを選択した。ロック。　翼に命中。錐揉みしながら派手に落ちて行く。
「爆弾は大事に抱えたまま落ちてくれ」
　ガルム１がブレイク。追いすがる敵戦闘機を処理するようだ。次の爆撃機編隊まで距離がある。やってやろう。
　ファントムか。３機程が来ている。ヘッドオン。すれ違い様にガルム１が撃墜していく。２機通過した。翼に描かれた特徴的な逆三角形の国籍マーク。
「フォックス２！」
　短距離ミサイルが蛇のように食らいついて敵機を食う。撃墜の火

球で雪山と空の雲を溶かしてくれたら戦いやすい。
「またガルム2に全部持ってかれるぞ」
「ピクシー。俺たちの分も残しておいてくれよ」
「俺たちだって落とすぞ。行け！」
傭兵連中はおしゃべりだが中々やる。落ちていくところを見る限りは頼もしい。
「あの爆撃機、随分と古典的な機種だ」
ベルカ軍の爆撃機は2機種ある。一つはオーシアとユークトバニアの冷戦期に流行ったB―52。もう一つはベルカ国産の機種、Bm―335。名前はリントヴルム。前から見ると胴体を二つ縦に段違いで重ねたような見た目をしている。エンジンは4発。生意気にも後部に機関砲銃座がある。回り込んだ敵機を落とそうと後方へ向けて曳光弾が煌めいている。
傭兵仲間の乗る細身の戦闘機が敵機を落とした。爆弾の親鳥はあと4機。護衛機の動きに落ち着きがない。
「敵爆撃機1機が戦域を離脱中。ビビったか？」
「ここまで来て離脱？」
編隊から外れる機体が見えた。離脱するくせに護衛機を付けないのか。撃墜してしまうか見逃すか。どうする。
あいつは見逃した。戦わない奴に関心がないかのように照準を外した。なるほど、こういう奴か。
「さあ、残りは1機だ」
ガルム1が撃墜する。
敵戦闘機は奮戦空しく足早に離脱して行くのが見えた。守るべき親鳥が全部落とされたなんて、にわかには信じがたく感じることだろう。
「逃げ帰ったベルカの奴らが、上に戦果報告するのを見てみたいもんだ」
生き残った傭兵仲間たちが声に出して笑う。損失はほとんどないに等しい。寄せ集めの部隊にしては、上々過ぎる戦果だろう。生き残れば、それだけでも儲けものだ。

こいつは、同じ匂いがする。
「サイファー、お前とならやれそうだ。よろしく頼む。相棒」
サイファーは無言だった。

「筋は？」
意外だったのか、記者はカメラを伏せ、間抜けて聞き返してくる。
「おいおい。誰だって初めから出来る奴だなんて思えないだろう。あいつも例外じゃない。けど、あいつは初めからそうであったように、強かったな」

「次は何を聞かせてくれますか」
この記者、もう次の話を聞きたいようだ。笑ってしまいそうになる。
「１７１号線奪還、Ｂ７Ｒ…．そうだな」
俺は物語の続きを話し始める。

飛び行くは円形の空

「Ｂ７Ｒって、知っているか」
俺は記者にそう問いた。
「知っています。ベルカ戦争でも屈指の航空戦が行われた空域。ベルカの国境に位置するここは、『絶対防衛戦略空域』とも呼ばれていましたね。空軍でもトップエースが配置され、連合軍の腕利きを屠ってきた。貴方がたの記録にもありました、１９９５年４月２０日。〝鬼神〟と初めてそこを飛んだ日ですね」
そこまで知っているのか。なら長い前置きも必要ないというわけだ。説明する手間が省けると思えば、すぐに本題に入れて良い。俺はその方が好きだ。
「ベルカ絶対防衛戦略空域、Ｂ７Ｒ。通称、『円卓』。俺たち戦闘機乗りに与えられた舞台。そこには上座も下座もない。条件は皆同じ。所属も階級も関係ない。制空権を巡って、各国のエースが飛び交う場所」
あいつと揃って、俺たちにはお似合いだと言ったものだ。あそこ以上の舞台はない。戦う為に、飛ぶだけの為に、純粋にそれだけが俺たちの存在意義だった。
「『生き残れ』。それが唯一の交戦規定だった」
記者も時折目を閉じて、物語へ再び入り込むようだった。

出鼻を挫き、ついでに侵攻拠点の補給路を丸ごといただいたのを良いことに、ヴァレー空軍基地は勝気なムードが漂っている。
あれから傭兵パイロットの損失は無く、死に難く生き残ってきている。弾んだ報酬は酒とか、ポルノとか。オーシアからの嗜好品が中心だった。たまにこれで戦闘機は買えないかと司令部に言う馬鹿もいた。とにかく今はベルカを叩ける日が待ち遠しいそうだ。その繋ぎとして、各々が趣味を見せ始めている。
ガルム１、サイファーはと言うと、もう既に次のことを考えているようだ。哨戒任務とか些細な内容でも、マメに司令部に赴いては全体

がどう動いているのか知ろうとしている。熱心なことだが、そこまで知って俺たちに何か出来るわけじゃないのに、どうしてそこまでと首を傾げたくなる。
ウスティオ産のラム酒の飲みかけが散らばる頃、一人空を見上げる。
この空には一体、どれだけの意志が詰まっているのだろう。戦う意味、戦争の意味。地上にある感情を空に解き放つから、こんな戦争が始まるのかもしれない。少なくともあそこは、戦闘機乗りにとっては天国でなければならない。
ほら、また一人天国から帰ってきた。
目を地上に戻して、部屋に帰る事にする。

「ラリー、お前死ぬなよ」
朝食時になんとも縁起の悪いことを言われた。あいつらはまだ酔っているんじゃないか。遅れて来たサイファーが向かいに座る。
「朝に早々、死ぬな。だとさ」
話題ついでに言ってみる。
「死なないさ」
「どうして分かる？」
「お前が一番良く知っているだろ、ピクシー」
「俺には分からん。今日を生き残ることで精一杯だからな」
「なら神頼みか」
「神なんか信じちゃいない」
「じゃあ赤い翼に託してみれば良い」
「神よりそっちの方が良さそうだ」
朝食にしては濃くて量が少ないメニューを平らげる。先に行ってる。と伝えて司令部に向かった。
死ぬな。という意味が分かった。
俺たちはどうやらあの『円卓』に行くらしい。
「敵航空戦力とのコンタクトを認めた際の交戦は許可する。諸君らの実力が試される時だ」

強行偵察に敵戦闘機との交戦。実質これは、『落とすまで帰ってくるな。』ということ。
単純明快で酷い作戦だが、俺たちが貧乏くじを引いてしまったのなら仕方ない。任務ならするまで。
支度をしてハンガーに向かうと、傭兵仲間が数人ついてきた。愛機の前で俺たちを見送るつもりらしい。
いつものように機体のプリチェックを済ませて、タクシーウェイを走らせる。整備兵も揃って見送るのが見えた。
「ガルム隊、離陸を許可する」
向かうは死地か、天国か。
『円卓』という天秤にかけられた空に、翼をはためかせる。

スティール・アライブ

高度４０００フィートでも空にすがる山脈。Ｂ７Ｒ。
山以外には何もない。飛ぶ為だけにある場所。勝つか負けるか。空戦を単純化すれば世界はこのくらいシンプルになる。
ウスティオとの国境のここは、飛んでもそれほど遠くは無い。増槽を積んで少し飛べば空中給油機なんていらない程に。
１７１号線奪還から、今回もＡＷＡＣＳがついてきた。あれはウスティオの虎の子だ。かつてはベルカ連邦の一つで、その名残から空軍力に力を入れて来たウスティオが、戦闘機の拡充よりも優先して導入した早期警戒管制機という代物。名前はイーグルアイと言った。
こちらイーグルアイ。と無線で呼びかけて来た。
「Ｂ７Ｒに侵入し周辺の状況を探れ」
「ガルム１了解」
「ガルム２了解。俺たちにお似合いの場所と任務だ」
サイファーが翼を揺らして合図する。
「レーダーに敵性反応、警戒せよ」
「くそ」
イーグルアイの警告間もなくして、一番近い動体目標がレーダーに映る。いないわけがなかった。ベルカ空軍機。一体何機がここにいる？
しかしながらベルカのやり方は変わっていない。２機３機、あるいは４機の編隊でしか来ない。ロッテ、ケッテ、シュヴァルム。大昔、戦闘機がプロペラで飛んでいた時代にベルカが生み出した空戦術。このベルカ語は、国を越えて定着している。
向こうも気づいたようだ。横動く敵機がこちらに南下してきた。
「ガルム隊、交戦を開始せよ」
マスターアームオン。ＭＲＭ、レディ。
「生き残るぞ、ガルム１」
翼をひるがえしてブレイク。一番近い敵機にロック。
「ガルム１、フォックス３」

「ガルム2、フォックス3」
イーグルは増槽を切り離す。サイファー共に身軽になった。アフターバーナーに点火する。
けん制で撃ったミサイルが命中したのを横目に国境内へ強行突破。全部を相手にできない。
速度計と高度計が目まぐるしく動いて行く。機体は素直に敵機に見つかっていると報告してくる。この一瞬たりとも計器が休まないのがＢ７Ｒだ。
どうするサイファー。俺はお前についていく。
更に２機編隊が突っ込んでくる。素早く装備を選択し直す。ＳＲＭにＲＤＹの文字が付く。
ヘッドオン。捉えたら直ぐに発射した。フォックス２。
派手に旋回するベルカ空軍のミグ。ブレイクが間に合わない。ミサイルの近接信管が作動して翼を根っこから持っていく。もう１機は火球となっていた。
空域を四角く見て、斜めに対角線状に伸びた山脈が国境。それを今、越えた。
「警告。エリアＢ７Ｒに高速で侵入する機影、新たに捕捉」
どうやら遊覧飛行とはいかないらしい。聖域、というべきか。
「ガルム2から1へ。敵の増援、おそらく本隊だ」
機数は４。ベルカのエースは大抵４機編成という話を聞いたことがある。味方の部隊を突っ切ってやってくる。友軍に『どけ』と言っているように。
さぁ来い。空戦で確かめてやる。
「ガルム隊へ撤退は許可できない。迎撃せよ」
「だろうな。報酬上乗せだ。そしてここは『円卓』、死人に口なし」
敵機がダイブして飛び込んでくる。サイファーが右にブレイク。俺は左。ドッグファイトを仕掛ける前に加速して旋回。上昇。遠目に敵機が見えた。タイフーンか。
「奴らはタイフーン乗りか。あいつの機動を甘く見るなよ」
イーグルと違って三角形状の翼と頭に付いたカナードが意外にも

軽やかな機動性を生み出す。ベルカが近年導入した格闘戦用の新鋭機。もうエースが乗るとは、流石だ。
翼端から伸びる飛行機雲（コントレール）にサイファーが噛みつく。後方から見ても凄まじい機動。同じことをすれば操縦桿から手が落ちる。
アラート。側面から。ガルム２ブレイクと宣言。
ミサイルが掠める。誘導が甘い。格闘用の武装じゃない。
「あいつら遠距離から狙ってくるぞ。気を付けろよサイファー」
「ガルム２、散開して良い。こちらは任せろ」
「了解した」
サイファーを引きはがそうとする敵機に食らいつく。右旋回でブレイクされる。一瞬おいて大回りに追随。１８０度のローリング。降下しつつ水平機動。捉えた。
僅かに水平に戻る瞬間を見逃さない。敵のタイフーンがイーグルのＨＵＤに飛び込んでくる。目標指示がガラスの向こうの実体を捉えた。ロック。
「ガルム２、フォックス２！」
連続した高Ｇ機動はいくらベルカンエースでも無理だ。回避が間に合わない、命中。
「ガルム２！チェック・シックス！」
後方警戒レーダーが警告音を響かせる。敵機後方、ロックオン警告。
スロットルレバーを後方に倒して急減速。操縦桿を上に、斜めに捻り込む。楕円形機動（バレルロール）で回避。敵機が下方を通り過ぎる。が、向こうも速い。再上昇でこちらを回避する。他の僚機よりも数段速い。
警告。ロックオン。
こちらはまだ半分しか旋回し終えていない。機体に取りつけられているバックミラーには赤いタイフーンが見えていた。
くそ。
切り裂く音。機関砲が曳光弾を煌めかせて機体をかすめる。次は当てられる。愛機の悲鳴は『円卓』に届かない。コックピットにこだまする。

３６０度ローリング。翼を動かし続けなければ負ける。間髪入れずに操縦桿を前に倒してダイブ。敵機が再度機関砲を発砲。ちくしょう、なんて食らいつき方だ。
機体の高度計が反時計周りに回転して行く。急降下。近づく地面に逆らって操縦桿を後ろに引いて引き起こし。加速とＧに身体がシートに張り付いた。
ミサイルアラート。
後ろに引き続けた。大きな弧を描くループ機動。機体が頂点に、降下態勢。
瞬間、こちらを追う敵のタイフーンと高速ですれ違う。赤い以外分からない。ひょっとしたら２機がくらいついているのかもしれない。１機しか映っていないのに？
ここはもう、ダイブするしかない。サイファーの位置は？
「ガルム１、フォックス２」
サイファーが俺に食らいつく敵機を引きはがすようだ。敵機がブレイクする。敵機とは反対方向に旋回。サイファーの後方に入れる位置に立て直す。
動きのそれは恐らく隊長機なのだろう。サイファーでさえロックオンしきれない。残りのエース部隊機は掩護が遅れていた。
もっと隊長機がピンチになる想定を飛んでおくべきだったな。チャンスは逃さない。ミサイルロック。フォックス２。
エンジン部に命中した敵機が胴体二つにえぐれて落ちて行く。
追いついた。サイファーが機関砲を発射。敵機の旋回に差し込むようなビームアタック。黒煙、爆発。まき散らす煙を切り裂いてサイファーが飛び抜けた。
上がる息をなんとか抑える。こんな空戦は久しぶりだ。イーグルアイより帰投が宣言される。敵の残りは撤退して行く。
「連合軍作戦司令部より入電。『連合軍海上部隊は進軍を開始。貴隊の活躍に感謝する』」
はあ。と俺はため息をついた。少し頭が冷える。
「なるほど。俺たちは捨て駒だったようだ」

捨て駒。傭兵らしい使い方。代わりはいくらでもいる。雇う雇われだけの関係。死に難く生き続けて来た奴が背負う、カルマ。
俺たちは綱渡りをする。生き死にが最も近い場所で。その外側にはいられない。だが、今日は生きた。
「よう相棒。まだ生きてるか？」
サイファーは答えない。

「壮絶な空戦。彼との初『円卓』が、こんなにも凄まじいものだったとは」
「あんたのことだから、俺たちが撃墜したエースにも会っているんだろう？どんな奴だった」
トンプソン記者に問うた。あの時は敵がどういう奴かなんて調べることもしなかった。
「あなたたちが撃墜したのは、ベルカ空軍でもプロパガンダに使われていた男の部隊でした。誇りと威厳に満ちている、ベルカ空軍を地で行く人物。傭兵なんかそれこそ嫌いだったそうで。未だに当時の事は鮮明に覚えているそうです」
「誇り、ねえ」
プライドに生きたエースだったわけだ。なるほど、それは俺たちとは相いれなかったわけだ。そんな俺たちに落とされるなんて、なんとも気の毒に。
「彼とはあの後話は？」
「戦果報告くらいか。流石にあいつも直ぐに自室で休んでいたよ」
思い出すとこちらまで疲れて来た。当時の疲れが呼び起こされたのかもしれない。
次の話をする前に、俺は水を飲んだ。

誰が為に鐘を鳴らす

時折、聞こえてくる銃声に耳を澄ました。
遠いが散発的に戦闘が起こっているようだった。義勇兵は義勇兵。所詮軍隊の真似事でしかない。優れた装備もあるわけではない。そう理解出来ない奴から、死んでいく。
風が吹いた。瓦礫から巻き上がる砂煙は、室内にもやってくる。首に巻いたシュマグを口に当ててやり過ごす。抱えたＡＫはうっすらと砂で茶けていた。砂を掃って抱えなおすと記者が口を開いた。
「ここに来てどのくらいなのですか」
「長くはない」
「では、どうしてここに？」
「そうだな。何か、思い出すものでもあったからだろうな」
わざとはぐらかすように答えた。「どうしてここにいるのか」の答えは、まだ自分の中で固まっていないからだ。そしてそれは、彼について語り切った後に出てくるものだと思っている。物語は続いているのだ、きっと。だから締めに話すべきだろう。
何か響く音が静かな空気に乗ってやってきた。
カーンと聞こえた。記者も思わず外を見やっている。金属を弾いたような、何度も鳴らされるような、そんな音が。
「鐘。か」
また一つ。いや、忘れるべくもない。あの鐘の音は耳に焼き付いている。あれこそ本当に自分が空にいる意味だと感じた。
あの鐘の音は、誰の為に鳴らされたのだろう。

５月１２日、午後。
オーシア軍を主とする連合軍の空挺作戦は成功裏に終わった。早朝の蒼天に舞った勇者たちは、確かにウステイオの国民にとって希望となり得ただろう。
このところヴァレー空軍基地に所属する作戦機は、必ず半数は出撃している。半数と言っても１０数機しかないところの「半数」なわけ

だが。こんな状態でも連合軍からアテにされていることを正規軍の仏頂面は声高にして語っていた。戦果を挙げる度に、その声量は大きくなる。もちろん傭兵たちはそんなことに興味はないのだ。次の出撃はいつなのか、それだけが最大の関心事に過ぎない。

基地のレクリエーションルームにあるブラウン管テレビが、連日の連合軍の勢いを語っている。電撃攻勢のベルカ軍を尽く打ち倒し、今にもベルカ本土へ脚を踏み入れることだろう、と。こんな分かり易いプロパガンダなど誰が真に受ける?我ながら咳払いにも似た悪態をつく。まるでもう戦争に勝ったかのような報じ方だからだ。

「俺たちのことは取り上げてくれねえのか」

「全部オーシア様が一人でやってることなんだろう。正規軍の司令官を見たか?あいつもそんなもんだ」

「俺たちは傭兵だぜ。ニュースで取り上げたってヒーローにはなれねえのさ」

全くだ。手を止めていたカードも再開して拾い上げる。手札は時化ていた。

「サイファー。お前の番だぞ」

「キングのフルハウス」

「なんだって?」

サイファーがテーブルに並べた。キングが3枚、6が2枚。なんだこれは、と何度も見る。

「お前は、ピクシー」

「酷いカードだよ。お前、イカサマとかしてないだろうな」

「日頃の行い。かな」

サイファーが賭けていた嗜好品を手元に引き寄せた。内容は甘味だ。

「気の利いた曲をかけろよ」

サイファーに向かって言う。彼が立ち上がると、すっかり黙り込んでいたジュークボックスに手をかけて吟味し始めた。

まだ一緒に飛んで短時間だが、時々サイファーのことを考えてしまう。あれ程筋の良いパイロットが何故傭兵パイロットなんてやって

いるのか。傭兵として戦う意味はあるのだろうか。金ではないのは分かる。あいつは本当に興味が無いのだから。
やがてフラメンコが流れ出した。
「こんなのが好きなのか？」
「〝気の利いた〟って言っただろ」
隣国サピンの有名なフラメンコ。闘牛のような激しい文化にあって、曲調もアップテンポばかり。名前を象徴するダンスは、サピン空軍の空戦機動にも例えられている。
いつの間にかテレビも消して、フラメンコの音色を楽しんでいるのかのように傭兵たちはリラックスした顔つきになっていた。首で音頭を取る奴もいる。皆、これが好きなのだ。嫌いではない自分もいる。寄せ集めの一体感が心地良い。
たまにはリラックスするか。と背もたれに深くもたれれば、そこにもうサイファーはいなかった。

手筈は整った。
ソーリス・オルトゥスへ降りた奇襲部隊からの暗号通信「シャクヤクは西陽に咲く」が無事に届いた。だが重要なのはウスティオの首都、ディレクタスの奪還と解放であること。喜ぶのにはまだ早い。
ディレクタス解放作戦は予定通り実行される。第6航空師団の傭兵は全機出撃する手筈だ。文字通りウスティオにとっては残された全軍で首都へ突入することになる。この戦争の目的は、まさにこの為にあると言っても良い。今日まで生き残っていたパイロットも、何が起ころうが構わない腹積もりで臨む。
全ての戦闘機は休むことなく整備が続けられている。翌日の夕方にはもう出撃するから、十分な休息は人間も機械も平等に与えられないというわけだ。格納庫だけが太陽のように明るく、整備の喧騒はまるでオーケストラの様相か。
ピクシーは外の空気を吸いに、そこまで来ていた。5月というのに底冷えする。ウスティオの春は7月からだと言われたことを思い出した。その通りだが嫌いではない。この国で好きなものを挙げると

したら、この気候だから。身体が冷えるまで思いきり息を吸い、そして吐き出す。これを数度繰り返して、リフレッシュとしていた。
「ラリー」
　自分を名前で呼ぶ人は少ない。若いのにすっかり古強者の担当整備士が、その1人。ウスティオ人だ。
「お前に恨み言を言いに来た」
「なんだ。俺にそんな恨みでもあったか」
「いいや。たった今生まれたのさ。自分がパイロットじゃなかったことを、今日以上に恨んだ日はないね。悪いが言わせてもらう」
「今日で最期になるかもしれないからな、聞いてやる」
「この手でベルカをぶっ潰してやりたかったよ。ディレクタスを解放して、国を取り戻す。俺たちが生きる国だ。俺たちで取り戻さなかったら、誰がウスティオを導ける？ましてや外人部隊のお前らが先陣を切って突っ込むんだ。お前にこの悔しさが分かるか、ラリー」
　戦争が始まって、自力で国を守れなくなったウスティオが決断した外国人傭兵部隊の登用。正規軍の9割が損耗してもなお、今日まで生き残ってきた意味は功績が物語っている。だがしかし、傭兵を見る目はどこか変わらない部分もある。「外国人のくせに」などとは口が裂けても言えなかったのだ。ついに彼らはジレンマに耐え切れずに、憎まれ口をぶちまけるしかなくなったのかもしれない。
　目の前の彼は、言葉は選んでも同じことを口にしている。彼は赤かった。冷たい風すら、ここでは熱い。
　自由の為、民族の為、誰彼の為…、いくつもの戦いに赴いても戦いの意味などというものに価値を見出してはこなかった。それが仕事だから。それでもこの戦争は、もっと違うものがある気がする。
　誇りか。
「そうだよ。誇りだ。それだけは絶対に譲らねえ。自分の手で戦えなくたって、国の為に戦ってるんだよ、ラリー」
　ベルカに踏みにじられようと、戦える手段が無かろうと、最後までこの国の人間としての誇りを捨てない。生きている限り、生きている力をぶつけに行く。ベルカ戦争に勝ったとすればこの勝利は、彼らの

ような人々に捧げられるべきものだろう。
「国を持たないお前らでも、何かの為に戦える理由があるなら、俺たちが戦闘機を最高の状態にしてやる。俺たちの意志を、機関砲弾とミサイルに込めてやる。その代わり、失敗は許さないからな。ベルカにビビってディレクタスから逃げてきたら降りる場所は無いと思え。俺がお前を撃墜する」
　改めてその整備士に向き直ると、静かに深く頷いた。何かを言うよりは頷くことくらいが、自分にできることだから。整備士は言いたいことを言い終えてすっきりしたのか、爽やかな顔つきに戻っていた。
頼むぞ、と肩を叩くと整備に帰って行った。
「ピクシー」
　声で誰か分かる。
「聞いてたか？」
「いや」
「お呼びか」
「ああ。指令室に来るようにって」
「すぐに行く」
　作戦名が告げられた。「コンスタンティーン作戦」。
　作戦開始時刻は１６３０時。ヴァレー空軍基地を１５３０時には飛び立つ。全機フル装備で、弾も燃料も持てるだけ持っていくことになる。話の通り、第６航空師団の傭兵は全機出撃する。その中でも対空と対地に対応するチームに分けられた。
　サイファーとピクシーのガルム隊は空対空のチームになった。傭兵部隊で最も腕の立つ２人だから、という評価の下だ。両者共に異存はなかった。その上で、航空部隊の中では１番最初にディレクタスへ突入する。大役だね、と呟く。
　ベルカの対空陣地は軒並みディレクタスへ引き上げていて、道中の対空砲火の心配はないと司令官は伝えた。だから全速力で迎えと、やはり声高に語るのだ。彼も作戦に興奮している。悲願成就の大役を、自分らと同様に任されたのだからと納得した。
「サイファー、良いか」

指令室から傭兵たちが引き上げていく中で、ピクシーは声をかけて引き留めた。
「なんだ」
「俺たちでやるぞ。必ず」
「そのつもりだ。パイロットの誇りに懸けても、成功させる」
二人は拳を合わせて、それぞれの部屋へと向かって行った。
その夜は全員早めに寝ることとお触れが出た。そこそこに夜更かしをして反抗する傭兵たちも、今日ばかりはすんなりと受け入れたようだった。片付けられたバーカウンターやレクリエーションルームに違和感を覚えるくらいに。
部屋に設けられた唯一の窓を開け、滑走路を見渡す。誘導灯の明りだけが静かに照らついて綺麗だ。その誘導灯が1人の影を浮かび上がらせていた。
サイファーだ。
宿舎の外でじっとしているかと思えば、深呼吸をしている。数度繰り返すと今度は軽く走り出し、数分かけて格納庫の方を往復する。少しだけ見ているつもりが見つめてしまっていた。
やはり、俺と同じか。
窓を閉めて外気と同じになったベッドに寝転んだ。冷えた心地良さが眠気を誘う。良く眠れそうだ。
そう言えば向こうには鐘があったか。町中にあった大小の鐘たちを、鮮明に思い出すことができる。あの地にいる誰もが嬉しそうに、自分のことのように話すのだ。ベルカに占領されても鐘の音は変わることはないだろう。
誰が為に鐘を鳴らすのか。
ピクシーはそれ以上考えることを止めて、寝ることに集中した。

誰が為に鐘は鳴る

5月13日。
最終調整のブリーフィングを行う為に改めて傭兵が集められた。早朝早くには、ウスティオ正規軍第4航空師団の指揮官がやってきている。やがて部屋は暗くなりプロジェクターの起動する音だけが響いた。
「首都ディレクタス解放戦備は整った」
ヴァレー空軍基地司令官が、高まる期待を隠しながら淡々と語り始める。
「これにより、ウスティオ空軍第6航空師団による首都奪還作戦任務の遂行を発令」
作戦詳細が手短に語られる。
首都ディレクタスは、中心を流れるグレースケレ川に沿った5つの地域行政区画で構成される都市で、今回の作戦はその5つの区画を解放することにある。占領したベルカ軍はここにウスティオ方面軍司令部を置いており、地上部隊を中心とする部隊が広範囲に展開していることが分かっていた。
「今作戦の敵部隊殲滅は、ウスティオ全土解放と同義であり、我々の命運を分ける戦いでもある」
司令官が特に強調するように、「全土解放」という言葉に力を入れて喋る。ウスティオ国内に残されたベルカ軍は事実上、これだけと言っても良いのだ。
「未確認だが、周辺には強力な敵航空勢力が配備されているとの情報もある」
ちらりと一瞬、自分たちを見やる視線にピクシーは気付いた。言われなくても、と投げやりに視線を返した。何機来ようともサイファーとならやれる気がする。思わず握りしめた拳を意識する。
「ディレクタスを解放すべく、ベルカ軍を殲滅せよ。全力を尽くすのだ」
画面が暗くなり部屋の明りが灯る。傭兵たちは立ち上がって敬礼、

司令官も返す。そのままでいろとの声。先ほどの正規軍航空師団の指揮官がきた。高身長でまだ若い。戦争初期で生き残った正規軍の1割らしかった。制服はまだ汚れていて、辛うじてしわが見えるかどうかでしかない。残された者の顛末を垣間見ることができた。

「諸君ら第6航空師団を、我々第4航空師団がエスコートさせて頂く。必ずや、諸君らがウスティオ解放の礎とならんことを期待する」

彼もまた力強い敬礼を見せて、熱いまなざしを向けるのだった。

出撃まで30分を切った。

傭兵たちは各々の愛機の側で、プリチェックを済ませていることだろう。スクランブル用のアラートハンガーに縦列で格納された2機のF―15C（イーグル）は、既に準備完了という様子で主を待っていた。先頭の機体にはサイファーがいて昨日の整備士と会話している。ピクシーが来たことに気付き、軽く頷き合う。

機体を1周してこちらもチェックを済ませる。機体の左側に設置されたボーディングラダーからコックピットへ乗り込み、シートベルトやヘルメットを装着していく。自分でも分かるくらいに丁寧に。不思議だな、と思う。こんなに意識したことないのに。

機体の主電源を入れる頃に、トーイングカーでハンガーの外へ牽引された。左右のエンジンが立ち上がり咆哮に包まれながらキャノピーを下ろす。サイファー、ピクシー双方に発進準備完了の合図。無線から1番最初に離陸せよ、と指示が出された。

タキシーウェイの側で整備員が敬礼して送り出している。手を振るとか、そういうのは無い。皆黙っている。

「ガルム隊、離陸を許可する。行って来い」

ランウェイに着いた。サイファーが右、自分が左。ガルム隊は揃ってフォーメーション・テイクオフ。猟犬は西陽に傾く空に舞い戻った。

エスコートする戦闘機はたったの4機しかいなかった。デルタ翼の単座戦闘機は翼を振って合図すると、進路を開けて編隊を組みなおす。彼らは後方で空中警戒待機という任務が待っている。彼らも彼

らで、文字通りの最後の砦なのだ。
「第４航空師団より第６航空師団全機へ、幸運を祈る」
正規軍の戦闘機が順番にブレイクして遠ざかっていく。後は、自分らの出番だ。操縦桿を握り直して備える。イーグルアイも準備完了を知らせてきた。
午後１６時２５分。概ね予定通りにディレクタスの空域に突入した。高度は３０００フィート、大体地上がはっきり見えるかどうかの高さだ。サイファーが加速する合図をかけた。アフターバーナーに点火、あっという間にディレクタスが大きくなる。
左脚の太腿に貼り付けた地図に示したラインを今、超えた。作戦開始。マスターアーム、オン。搭載武装の全安全装置解除。短距離、中距離ミサイルレディ。
「ベルカ制圧下にある5地区を解放しろ。作戦開始！」
空中管制機（AWACS）イーグルアイからも宣言される。始まった。
「サイファー。作戦は成功する。俺たちの誇りは何よりも強い」
「行くぞ。ピクシー」
「了解」
第１区が見えてきた。レーダーに感あり。２機。中距離ミサイルを選択する。速度そのまま、高速で突っ込む。イーグルが敵機を識別。格闘戦闘機のＭｉＧ―２９。
「ガルム１、交戦」
「ガルム２交戦」
「あいつらをやる。いけるかピクシー」
「了解。いける」
ミサイルロック。特徴的なビープ音がコックピットに響き渡る。
「ガルム２、フォックス３！」
「ガルム１、フォックス３」
やや正面の敵機にミサイルが伸びていく。爆発炎が２つ、１機は墜ちた。もう１機は手負いだ。高度を下げながら離脱コース。サイファーは構わない。第１区の上空をそのまま飛びぬける。
対地攻撃部隊が突入したのだろう。ＡＷＡＣＳから攻撃開始の指

示が飛ぶ。レーダー上の味方機の表示が賑やかになってきた。第2、3区の上空で敵機を捉える。格闘戦闘機が数機来た。
「ガルム隊、援護位置に着く。そのまま行け」
傭兵の小型戦闘機（タイガーシャーク）が左後方で守備の体制。敵機とはヘッドオンの構えだ。武装を短距離ミサイルにセットする。敵機とすれ違った。サイファーが右に高G旋回で素早く回り込む。ベルカ空軍の敵機は他の傭兵に食らい付いた。彼らを模倣した機動で翻弄する間に、サイファーはもう射撃体勢だ。
「ガルム1、フォックス2」
ミサイルが容赦なく敵機に命中した。ナイスキルと送る。傭兵を振り切ってやってきた片割れが突っ込んできた。自分が射撃位置、操縦桿を倒して相対する。敵機が機関砲を発砲。バレルロールで回避。そのまま操縦桿を引いてループ機動で上方に付ける。自分を一瞬見失った敵機にロック。発射。
「ガルム2スプラッシュ1」
「ナイスキルだ。ピクシー」
機体をバンクさせて下方を確認する。1機だけ外れに向かっているのが見えた。戦闘機ではない、ヘリか。行政ビルから飛んで行ったのか。
「こちらイーグルアイ。ベルカのヘリが戦線を離脱中、奴ら逃げ出したか？」
「どうする？サイファー」
「構わない、いや・・・」
サイファーが言い切る前にミサイルの白い軌跡が飛び込んだ。爆発。ヘリは墜ちたろう。だがここまで来て手を抜けるわけもない。傭兵を止める理由は上空に無かった。もう対地攻撃の部隊はなだれ込むように飛んで行っている。1区から2区までは解放を宣言する声を地上部隊が挙げ始めていた。
ベルカ空軍は各区上空の防衛から残りの戦闘機を集結させるようだ。ＡＷＡＣＳ（イーグルアイ）が捉えた敵機は6機程度しかいない。畳み掛けるなら今だろう。

「こちら連合軍第1歩兵大隊、鐘の音が聞こえる！市民だ！市民が鳴らしている！」
「市民が通りに出てベルカ軍を追い出そうとしている！空の連中、絶対に当てるんじゃないぞ！」
歓声が無線越しに聞こえてくる。勝負はあったかもしれない。
「行こうサイファー。仕上げにかかろう」
愛機（F―15）が敵機を捉えた。短距離のミサイルを選択、サイファーと共に加速する。ヘッドオンで相対、高速ですれ違う。その間に傭兵の対地攻撃機が低空で突破。残る区画の対空砲を掃除しにかかる。
機体を深く横転させて右旋回。高G機動に身体が張り付く。サイファーはそんなこと気にしないかのように鋭く旋回し続ける。だが相手もエースだろう。派手目なカラーリングを施したF―15の新型だ。カナードが生えていて動きが機敏に見える。単純な旋回なら向こうが速い。
サイファーが左へ切り返した。意図が分かる。ピクシーはそのまま旋回し続けろということだ。一瞬でも遅くなれば敵エースは直ぐにでも背後に着くだろう。付いてこい。推力を上げて操縦桿を強く握りしめる。取り巻きが隙を見て攻撃してくるとかは考えない。仲間の傭兵を信じた。
首を目一杯後ろに向けて旋回。敵機が追随してくる。攻撃レーダーを指向されている警告音が鳴り響く。おまけ程度でしかないECM（電子対抗手段）がフルに稼働している。半周して左へ。
「ピクシー、そのまま行け」
「ガルム2了解」
派手に機体をローリングさせて下降し、180度ターンのスプリットS。サイファーはいた。
「ガルム1フォックス2」
爆発炎が見えた。夕陽に照らされて眩しい。
「連合軍の傭兵か！恩に着るぜ、ありがとよ！」
「第4区の地上部隊を排除！市民が自由の鐘を鳴らしている！」
地上部隊からも歓声に似た宣言が聞こえてきた。勝ったのだろう

か。
カーン、カーンと戦闘機のジェット音にも負けない鐘の音が聞こえてくる。市中にある全ての鐘が鳴っているに違いない。独立を勝ち取った時も、同じように鳴ったのだろう。
「懐かしい音だ」
傭兵が一人呟く。
レーダー上から残り2機程になった敵機が撤退していく。この空を邪魔するものは、もうどこにもいない。機体をゆるりと旋回させながら、気が付けば鐘の音を聞いていた。自由の証か。これこそが、戦う理由なのだ。
「こちらイーグルアイ。全区解放されたようだな」
「彼らには戦う理由がある。勝敗はついた」
ピクシーは1人呟く。戦う理由がある時点で、既にベルカは負けていたのかもしれない。
サイファー、と話しかけるところに緊急信号の波長が飛ぶ。イーグルアイの慌てた声が続けて飛び込んできた。
「警告！警告！敵増援部隊の接近を確認！」
「今さらかよ？」
思わず声に出す。サイファーは何も喋らない。だが編隊を組み直す。戦闘態勢に。
「機影は2機、高速で接近中！」
レーダーに映った。捉えた機影の速さが分かる。こいつらは、恐ろしく速い。ならば相手が出来るのはサイファーと自分しかいない。2人は揃って胴体に抱えた増槽を落とした。
「ここは俺たちで相手しよう」
「今までの奴らより速い、攻撃開始！」
オフにしていたマスターアームを再びオン。愛機の火器に火を灯す。速度を上げてヘッドオン。翼を垂直に立ててブレイクしつつすれ違う。コックピットにまで風圧が飛んできそうな勢いで飛び抜ける。間違いなくエースだ、ピクシーは唾を飲み込んだ。
良いだろう。Ｓｕ―３７２（チェルミナートル）機、相手にとって不足はない。

「この2機をやらないと、基地には返してくれなさそうだな。サイファー」
交戦を宣言。右旋回して視線を上に見やる。敵機がもういない。ロックオンの警告音が鳴り響く。ちくしょう。
スロットルを叩きこむ。加速した勢いのまま操縦桿を手前に引いてピッチアップ。加速感とループ機動に入った高Gに息を入れて、インメルマンターン。後ろを振り返る。やや大回りに上方へ飛び出す敵機が見えた。振り切れてないか。
瞬間的に見たレーダーにはサイファーともう1機がダンスのように入り乱れている。このままでは勝ち目はない。
「サイファー、こっちが見えるか?」
「了解。援護する」
機体を上昇させてもう一度加速。サイファーが前方からやってきた。左にブレイクして後ろに着けるように素早く旋回機動に入る。敵機もブレイクして編隊を組み直すようだ。2機なら2機で、ベルカの騎士道精神がここに現れた。動きは完成されている。
「ガルム2、被弾したか?」
「ピンピンしてるよ」
特徴的な黄色い敵機が目の前に迫ってくる。こちらを挟み込むような態勢で左右に旋回してくるつもりだろう。サイファーが右に切る。ピクシーも続いた。
ガルム隊が2機同時に上へ跳ねる。面食らったようにブレイクした敵機が真上をすり抜けた。後方につけたもう1機が猛然と迫る。ピクシーはスロットルレバーを手前に倒して急減速、ひらりと後ろへと後退。サイファーが似た機動を繰り返し、いよいよ敵機を前方に捉えることができた。片割れが追いつく前にとトリガーに力が入る。
ミサイル警告。後ろからではない。前から。
「サイファー!」
照準が甘かったか、ミサイルが外れる。後ろ向きにミサイルを撃ったか。しかし捉えて逃がす猟犬もいない。サイファーが噛み付いた。機銃を発射。敵機が火炎を吹いた。推力を失ってスピンしながら落

ちていく。
　残りの1機は動揺せずに突っ込んできた。機関砲が掠めていく。ダイブして回避。ガルム隊は縦に別れるようにして散会した。
　敵機が止まったかのようにその場で奇妙な機動を繰り返して、飛んでいる。この状態で戦えるというのか。鳴った警告音に背中がひやりと震える。
　サイファーに向けてミサイルを発射した。回避して直進。任せた、と言われたようだった。素早くミサイルのリリースボタンに手をかけて、押す。失速機動で抵抗するＳｕ―３７にスローモーションで吸い込まれていく様が見えた。爆発。
　ピクシーは乱暴に酸素マスクを外してため息をついた。
「当該空域の脅威、ゼロ。ガルム隊作戦完了だ」
　ガルム隊の2機はディレクタスをフライパスする。なるべく低速で、見守るように。
「この地区は俺たちが取り戻した！もうベルカのものじゃない！」
「我々は街を取り戻した！」
　誰かがラジオ放送で流しているのだろう。花屋や時計屋の歓喜する声も聞こえてきた。自由の声が身体に応える。ピクシーは小さく拳を握りしめた。
「サイファー、自由を手にする民衆の声が聞こえるか！これが俺たちの戦いだ！」
　彼は喋らない。だが、その背中には確かに届いていることだろう。
「１９９５年５月１３日。ウスティオは解放されましたね」
　トンプソンという記者は言った。
「俺たちの戦いは、そこにあった。ディレクタスの熱がどれだけのものだったか分かるか？今も焼き付いているんだ。鐘の音が」
　思い出すと、当時のコックピットのように拳を握りたくなる。
「ええ。駆け出しの新聞記者だった私でも、そのニュースは鮮明に覚えています」
「当時の記録はあるのか？ニュースの」

「ありますよ。地上にいた兵士と共に旗を振る様子も」
やや焼けた写真を差し出された。歓声と笑顔、全てが写真から届きそうだ。
「戦争の風向きも、ここで変わりました」
「俺たちの仕事は終わった筈なんだ。あそこで。だが現実はそうじゃない」
「例のことについても、その頃から？」
「おいおい。そこまで知っているのか。俺が話す必要あるのか」
「あなたの口から聴きたいのです」
そう言って記者はカメラを降ろす。
「あの時、一つ手紙が届いた」
「差出人は？」
「ジョシュア・ブリストー」

2章：臨界への空路

地獄遍路

もう次の作戦が決まろうとしていた。

ウスティオ解放と同時に周辺国への影響力が落ちてきたベルカは、徐々に後退する形で引き上げている。お陰でウスティオ以外の国家の解放も案外早くに終わりそうな勢いで、もう傭兵の出番もないだろうと思われていた。

ウスティオ空軍第6航空師団に課された使命は、正規軍の戦力補充としての機能と本国を守り抜くこと、それだけだった。規模的に国の外へ侵攻することなど考えていない。あくまで正規軍の再編が整うまでの〝時間稼ぎ〟に過ぎないからだ。それが今、必要無くなったというわけである。

そんな折、ガルム隊には連合軍本部から直々に戦力提供の依頼が届いたのだ。

「出来る奴には仕事が集まるって事ね」

ピクシーこと、ラリー・フォルクは会議の後に言い放った。自分たちの戦果を考えれば分からなくもない判断ではあるが、白けた気分だ。

「ここから先に何の意味があると思う」

「もしかしたら、俺たちは地獄の切っ先になってしまったのかもしれないな」

サイファーは空を仰いで答えた。

こいつも同じ気持ちなのだろうか。それとも、自ら戦いに赴きたいのか。戦争がしたいようには思えない。だとすれば、サイファーなりに戦争に対する確たる考えがあるのかもしれない。だがそれを今日まで口にしたこともないのだ。

自分達地獄（ガルム）の番犬が、今度は災い（フェンリル）の怪狼にでもなってしまったのかもしれない。いや、まさに今変身を遂げようとしている最中で自分達は気付いていないと言えるのか。

ピクシーはため息混じりに息を吐く。
考えるのは止めよう。こんなことしても意味がない。既に始まってしまったことだ、地獄だろうがそれ以外だろうが行くところまで行くしかない。いや、行くしかなくなってしまったのだ。
「ラリー・フォルク少尉」
薄い封筒を1枚持った将校に話しかけられた。
「なんでありましょうか」
「お前に手紙だ。受け取れ」
「自分に？差出人は？」
「書いてない。ただ送り主はオーシア人だな」
「書いてない？そんなものを受け取れと？」
「良いからさっさと取れ。中身については不審物の検査だけはしてある。紙切れ一枚だけだ」
ほら、と伸ばされた手から手紙を受け取った。確かに封筒の裏表には宛先以外は書かれていない。見た目では誰が送ってきたのか判断がつかなかった。手紙を送り合うような友人もいなければ、送ってきそうな心当たりもない。
ピクシーは、そのはっきりとオーシア語で書かれた宛名を読み返した。『ウスティオ空軍第6航空師団、ラリー・フォルク』。
検閲はされていなかった。当然と言えば当然かと思い直す。しかし、未だにユークトバニアとベルカでは行われているらしいという噂はあるが。ポケットにしまって振り返る頃にはサイファーも居なくなってしまった。諦めてピクシーは自室に戻ることにした。
机とセットの明りを点けて、慎重に封筒を切った。真っ白な綺麗過ぎるA4サイズの紙が一枚、山折りで丁寧に入れられていた。余程マメな奴らしい。
手紙を広げて、ピクシーはまず下に目をやった。こういうのには必ず最後に差出人の名前を書くものだからだ。勿論、名前が書かれている。名前は『ジョシュア・ブリストー』。
ブリストー？一瞬、ピクシーは自分の記憶を辿った。こいつはオーシア空軍のブリストーか。その昔の紛争で一緒に飛んだ馴染み深い

旧友と言っても良い。未だに彼の飛び方も覚えている。〝青い魔術師（ルーカン）〟と呼ばれていた、巧みな戦闘機動と僚機の使い方。間違いなくエースだった。
『お前は使われているだけだ。それは戦う理由とは違う。お前の戦う理由はなんだ。』
短い文面が、やけに立体感を帯びていた。いたずらか、と思ってしまいたくなる。自分に投げかけてきた問いにしては、やけに分かったような言葉を使っていたからだ。
得も言われぬ気持ち悪さが身体中を駆け巡り、じわじわと血の気が引いていく感覚にも襲われた。横になろう。ピクシーは手紙を放ってベッドに横たわった。
俺の戦う理由？そんなもの・・・。
日が落ちかけている。
あまりの寝覚めの悪さに頭をかいた。寝て忘れようという試みは失敗してしまったらしい。他人に聞こえないまでに落とした溜息を吐く。手は汗で濡れていた。手だけなら良かったのだが。
放った手紙が冷たい風に飛ばされてベッドの側まで来ている。そのままにしておくのも気持ちが悪い。丁寧に畳んで逃げるように机に仕舞った。もうしばらくは引き出しを開けることは無いだろう。
いつのものようにレクリエーションルームへ訪れると、傭兵仲間が声をかけてきた。
「ピクシー、見てみろよ」
「何、ってニュースか」
オーシアからのニュース番組にチャンネルは合っている。この間見たものと同じだ。
『ベルカ、核兵器を保有か？』
テロップがこれでは、嫌でも目に着く内容だった。核兵器だって？ピクシーの眉間には深い皺が寄った。
『連合軍はベルカが核兵器の開発、あるいは保有しているとする確たる証拠を掴んでいます。この中には核兵器以上の大量破壊兵器も含まれていました。この戦争を終わらせる為にも、一刻も早い核査察が

必要でしょう。既に連合軍はベルカ国境まで戦線を押し返していますが、更にベルカ国内へ踏み入れる理由も適当であるとして――』
「ついに親玉の大将をぶん殴れるってか」
「俺たちの分まで残してくれよな」
『加えて、ベルカが開戦の根拠に主張している天然資源の権利についても不当であることは事実であり、これを放棄させなければならないでしょう。元来帰属している国家の資源も含まれていますので連合軍の手によって再分配が必要です。この根拠については旧ベルカ連邦の構成国家の独立から紐解いて行かなければならないのですが――』
「なあ、ピクシーは行くんだろ。連合軍から指名だもんな」
「行くって、俺は行かされるだけだ。それが仕事だ。羨ましがられる言われはないね」
「それ嫌味じゃないだろうな」
「変われるものならとっくに申請してる。言わせるなよ」
　溜息すら吐く気が失せてしまった。
　ウスティオ方面の戦線に関して、ここの傭兵が成し遂げた功績は大きい。皮肉にもウスティオ最強の戦闘航空部隊として宣伝されてしまった。国内のみならず、諸外国ですらそうだった。当然期待の眼差しは熱く注がれ、今や戦果報告を待ちわびるメディアもある。特にガルム隊のものは。
『連合軍によりますと、今後数時間から数日以内にベルカ本土への攻撃について発表するとのことです。既に一部の情報筋では本土侵攻の許可を出したとされ、発表と同時に攻撃が始まると予想されます』
　喉が渇いたとバーカウンターを見やると、サイファーがいた。それも真っ直ぐピクシーを見ている。目が合うことに気が付くと、カウンターに視線を戻してしまった。どうせならと彼の隣に座り、同じものを頼んだ。
「サイファー、さっきのことだが」
　傭兵仲間との会話を切り出す。
「いや、良い。俺もお前のように答えてたさ。ピクシー」

「そうか。でもあの視線は鋭かった」
「どうしてだろうな。相棒だからかな」
「それだけか？」
「それだけだ」
　サイファーは誤魔化すように残りを一気に飲んだ。酔っている様子はなく、適当に言っているようでもない。やがて自分のグラスが来ると、ピクシーも酒を飲んだ。ただのジントニック。辛めのだ。
「そういえば俺たちがどこへ行くのか、何か分かったことはあるか」
　半分くらい飲んだ後に、ピクシーは言った。
「何も。だけど連合軍がベルカに攻め込むつもりなのは、本気らしい。明日にも概要を話すって」
「オーシアか」
　連合軍の盟主的存在であるオーシアは、連合軍戦力の大多数を占めている。ベルカ国外の戦局が傾いた今、これはオーシアの戦争になりつつあった。
「それに、行かされるのは俺たちだけではないかもしれない。あいつらもだ。きっと」
「結局は全員地獄行きか」
「そうだ。あの空は地獄だ。人の命を無際限に吸う地獄だよ」
「一体どれだけの血が流れたら、止められるんだろうな」
　テレビの映像では、資料として核兵器実験の爆発が映し出されていた。

「今思えば」
　深呼吸をするように言葉を出した。
「奇妙な雰囲気だったんだ。誰も落ち着いていなかった。あいつでさえ、そうだったと思う。得体の知れないものに食われる前ってあんな感じなのかもしれない。漠然とした何かが傭兵連中にはあった」
「これからベルカへ攻め入る、という時なのに？普通は盛り上がりそうですが」
「盛り上がりはしていた。最初だけは。あの時間は、今でも思い出せ

る」
「受け取った手紙との関係は？」
「正直、分からない。あの頃は手紙の意味をさほど理解出来ていなかったんだ。気味の悪い内容だとしか思わなかった。自分の奥底で燻っていた問題が出てきたような感覚だ。それがグラグラ揺れる、分かるだろう？雲がかかったような気分だよ。あいつも、そんな相棒の俺のことはお見通しだったのだろうが」
「恐らく、ブリストー元大尉の活動もこの時期からだったと記録されています。勧誘だったのでは」
「そう言われれば、勧誘の始まりだったかもしれない。だが俺にそれを理解する余裕は無かった」
　無かったのだ。今だから思えるが、ウステイオで戦う理由と向き合う準備が出来ていなかったのだと言える。ベルカへの侵攻は、もっと違う戦いになるのだと頭で分かっていなかった。
　自嘲気味に笑った。当時の自分にだ。
「そんな中、ベルカ領内侵攻が始まってしまう。ガルム隊は先頭を切っていたとあります。戦争の本質はここからだ。そうは思いませんか」
「誰もが正義にも悪にもなる。それを決めるのは誰なのか」
　呟くようにピクシーは言った。
「良い言葉です」
「あいつが言ったんだ」
「『彼』が？」
「いつ言ったのかは覚えていないが。ちょうど今みたいな話をしていた時だと思う」
「そうですか。しかし、そのような事を話すのですね。『彼』は」
「もしかしたらこの戦争について一番分かっていたんだろう。他の誰よりも」
　あいつがインタビューを受けたら、一体何を話すだろう。こんな自分の言葉よりよっぽど重みがある。この記者だって、聞きたいのはあいつの事だから。憶測で話してしまうのも記者にとって悪いことだ

とは思うが、サイファーのことについては少なからず確信を持って言えるのだ。真実がどうであれ。

記者も座り直す。物語の第二幕が始まる。

５月１７日。南ベルカの地獄の門を開いた日。

光線一閃（1）

これまでに世に出回るベルカ戦争の記録を読むと、高い頻度で目にする単語がある。『超兵器』と呼ばれる単語だ。戦前の都市伝説、兵士の与太話、時には戦果の誇張に利用された通常兵器、戦争が生み出した伝説は枚挙にいとまがなく、その中から真実を掬い上げるのも難しい。だが、強いて本物を挙げるとすれば、戦争中期で連合軍を焼き払った〝聖剣〟しかないだろう。

本土防衛型化学レーザー砲、エクスキャリバーである。

オーシアとユークトバニアの冷戦の煽りを受け、１９８１年に開始されたベルカのＢＭＤ構想、即ち弾道ミサイル防衛のための兵器だ。

世界遺産にも認定されていたタウブルク丘陵で建設する際の反発は、エクスキャリバーを象徴する出来事の１つと言える。それでも彼らは建てたのだ。力こそが全てだと言葉で言い、形で現して。建設はベルカ内外に広く宣伝された。しかし戦争が始まる直前まで、エクスキャリバーが完成しているのかも、試射が済んでいるかも伺い知ることがなかった。

ベルカがエクスキャリバーを実戦に投入したのは１９９５年５月１９日、ベルカ第２次防衛線攻略の日のことだ。そして、切っても切れない縁が如く、名前を連ねる部隊がそこにはいた。

ガルム隊である。

「あの時か？〟空が光った〟のさ」

〝聖剣〟を目撃し、「剣を抜いた」彼らは、そこで何を見たのか。

物語が再開すると、彼の目つきが変わった。

ハードリアン線の攻略は、連合軍の大勝利で終わった。

ここを超えて内地へ侵攻を決定した連合軍にとって、最初にて最大の難所とも言うべき要塞拠点であり、ベルカにとってここが落ちれば即本土決戦となる重大な局面であった。伝説の唸る怪物、『グラティサント』と名付けられたそれは、空を見渡す限りの連合軍機の猛攻を前に、ついに倒れることになる。

ガルム隊も参加した。隊では珍しく爆装が用意され、無誘導爆弾を抱えて飛ぶ。ピクシーも久しぶりの爆撃だったが腕は落ちておらず、これを成功させた。この時彼らが放つ対空砲火の弾幕を『津波が押し寄せる』と表現したのは、傭兵仲間からも評判である。

「そう言えばピクシー、何か見たんだって？」

既に出来上がっている仲間に問われた。手元にはホット・ラムだ。

「いや、大したものじゃない。空が光ったんだ」

「空が光った？なんだそれ」

酔っ払いにまともに説明する気は最速で失せた。ピクシーは切り上げるように言う。

「文字通りな。すまん、俺の気のせいかもしれない」

「司令部に報告しとけよ。それはきっと大昔ここで死んだベルカの幽霊だぜ」

「じゃあ幽霊ってことで良いからお前から頼む」

「お、おいおい」

可能な限りの作り笑顔で肩を叩くと、手を振って建物の外に出る。

雪が残るヴァレー空軍基地で白い息を混ぜながら、ピクシーは幾度目かの溜息を吐いた。自分たちは一体どこまで行くというのか。

ピクシーは、手紙の内容がまだ頭に燻っていた。

何が自分の戦う目的なのか。

意味とか、余計なことを考えるのは戦場に赴く兵士には不要だ。傭兵であれば尚更だった。嫌なら降りれば良いだけであり、穴を埋める代わりなど幾らでもいる。疑問を持っていることが分かれば、軍（雇い主）が直接解雇処分を下すだろう。

導き出しようのない答えが積もった。どこに解を吐き出せば良いのかも、まだ分からない。この空に解き放たれた思惑はひょっとすると制御ができない化け物を生み出すかもしれないのだ。

ピクシーは空を見上げた。

「ピクシー」

目の前に彼が立っていた。全くの無意識のうちに、背後に立たれていたらしい。振り返って応える。

「サイファー、もうお呼びか」
「ああ」小さく頷かれる。
　返事があれば良い素振りで、サイファーは踵を返して歩き始めた。その背中を見て、思わず問いたくなる。
「なあ、お前は」
「なんだ」
　彼が立ち止まり横顔だけを向かせる。その視線にピクシーは自分で何を問おうとしたのか、一瞬のうちに忘れてしまった。
「何でもない。行こう」
「そうか」
　遠ざかる背中が冷たい。

　ベルカ軍第2次防衛線攻略、その主力としてガルム隊が参加する。ただの地方国家の傭兵部隊が今や戦局を左右する立場に成り上がり、中でもガルム隊は一番槍に名が挙がった。〝ウスティオの傭兵〟という単語は、第6航空師団ではなく、ガルム隊そのものの意味として言われていると噂だ。連合軍はウスティオ空軍以上にガルム隊を評価し、持ち上げている。戦場には様々な話が飛び交うものだが、ピクシーはどこか冷ややかに聞き流していた。
　しかし正規軍の戦力化が未だに整わないウスティオ空軍は、別にそれで構わないらしかった。結果的に正規軍を急がせることなく、時間稼ぎに使える。
　空軍との契約もさらりと変わった。戦争が続く当面の間、無期限に雇用されるとのことだ。なんとも都合が良い。報酬は大して変わらないにも関わらず。
　ブリーフィングに意識を戻す。
　第2次防衛線は前線への補給を妨げている大きな拠点だ。大規模な機甲戦力を中心とした地上部隊、厚い対空陣地で構成された前線飛行場で構成され、そこに遠方から多数の迎撃機まで飛来する見積もりである。シェーン平原は、これでも足りない程度に、実際に広い。
　3本立ての作戦に、アルファ・ベータ・シータと方面が命名された。

自ら参加方面を選択出来ると言うが、ガルム隊においては強い推薦でシータ方面と決定される。この方面は空対空戦闘主体で、理由は明白だった。
「では諸君の活躍を期待している」
無骨な指揮官が威勢よく言い放つ。傭兵が揃って立ち上がり、敬礼。
中継地点の正規軍基地に着くまで、サイファーとピクシーは何も話さなかった。静かに2人揃って降り立つ。でも作戦に飛び立てば、いつもの猟犬に戻るだろう。居合わせた傭兵の誰もが、そう思っている。しかし夜の間は、ただ静かな時間が流れるのであった。
テイクオフ。
ガルム隊らウスティオ空軍第6航空師団の傭兵パイロットは、昼頃に離陸した。離陸してからしばらくすれば、各々で決めた方面に散会する。地上での作戦は既に始まっている。ガルム隊とシータ方面に来たのは、1個飛行中隊程度の数で、ピクシーは「そんなものだろうな」と呟いた。
ベルカに入ってしばらくすれば、起伏があまりなく緑豊かな土地に景色が変わる。ここからが作戦区域だ。シェーン平原は自然豊かなベルカの中でもとりわけ広大で、一面が緑色のカーペットが敷かれたと例えれば、理解がし易いだろう。それがどこまでも続く。空から見れば、ベルカを飛んでいる事を忘れさせた。自然のままの姿は、空からでしか分からない。
「サイファー、聞こえるか?良い眺めだ。ここから見ればどの国も大して変わらん」
彼は翼を振って答える。だがそれ以上は答えない。
天候は曇り。いつものことだ。灰色の空が頭上を覆いつくしている。しかし雨は降らない。これは運が良かった。雨が降れば慣れている向こうが有利だ。晴れ、あるいは曇りなら対等、あとは途中で急変しないことを祈るばかりである。
レーダーに映る友軍機の数が増えた。敵は近いだろう。反射的にピクシーはマスターアームを解除する。

複数の反応、敵機だ。イーグルのレーダーは纏まった数を捉えている。機種の識別は、FA—18C(ホーネット)か。MiGもいる。警告音がコックピットに響く。
「ガルム1、交戦(エンゲージ)」
「ガルム2、交戦(エンゲージ)」
武装は短距離のSRMを選択する。
「ベルカの戦闘機が迫っている。全機撃墜し、制空権を確保しろ」
AWACSのゴーストアイから指示の無線が飛ぶ。
敵機はヘッドオンの位置からか。ロックした。ピクシーはミサイルのリリースを押し込み、右翼側のミサイルが放たれる。敵機が急回避、避けられるとは思わなかった。その刹那、火球となっている。サイファーも敵機の片割れを同じように撃墜した。
「今日のエースはサイファーかもな。晩飯を懸けるよ」
近くで見ているのだろう、傭兵仲間が軽口をたたく。
「楽しい空戦と洒落こもうぜ」
「連戦連勝のウスティオ傭兵部隊か。お手並み拝見だな」
オーシア空軍のパイロットからもだ。憂鬱になりそうなのをこらえる。
攻撃をかいくぐった新手のMiGが突っ込んできている。格闘機として名高いMiG—29(ファルクラム)だ。サイファーが右にブレイク、ピクシーも同じハイGをかけながらブレイクし急旋回する。MiGが左旋回、こちらはそのまま右に旋回、どちらも同じくらいのターンだ。
速い。ベルカ勢には明らかな殺意がある。攻める時の攻撃機動だ。時間稼ぎだという甘い考えは、ここで捨て去った。
もう一度正面からすれ違う。スロットルを叩きこんで今度は左旋回、息を吸ってGに耐える。敵機は左右に分かれて挟撃のマニューバ。ガルム隊は2機共にぴたりと編隊を維持して左旋回、サイファーが前に躍り出た。行け、とピクシーは呟く。
右旋回をしている敵機はわずかに遅い。サイファーが落として反撃するまでの猶予はある。ただ、チャンスは一度しかない。HUDのGメーターは7から8を指している。とっくにイーグルの限界ギリ

ギリだ。仕留められなければ、失速時の機動性に優れるＭｉＧに食われることになる。
サイファーのイーグルの機首が僅かに持ち上がる。ピクシーは構えた。あいつが撃つ。ガン発射。敵機の翼がもげて錐揉み状態で落ちて行く。見届ける暇はない。警告音。相棒を失った敵機からミサイルが発射される。距離が近い。ピクシーはフレアを、サイファーはダイブして回避する。
敵機がサイファーに追随。いや、お前がやれと言うのだろう。ピクシーは機体をロールさせ背面でダイブ、加速して射程に捉える。ミサイルをロック。
「ガルム2、ＦＯＸ2！」
翼下の短距離ミサイルが数秒で命中する。派手な火球が咲いた。
「どうやらただの足止めに来たわけではなさそうだ。落とさなければ、落とされるぞ」
激しい息遣いの友軍機から無線が入る。
そうか。ピクシーは不意に納得した。彼らも同じだ。この空に誓った決意がある。そして、ベルカ軍人としての誇りが。戦局が傾こうが、絶対に譲れないもの。空では負けないと叫んでいる。
「決意、誇り・・・ベルカはそれで戦える」
息を整え、レーダーを見やる。明らかに敵機より味方の方が映っていた。ベルカ空軍は2機編成の〝ロッテ〟など、少数の編隊で来ることが多い。だから一度に見える敵機の数が少ないのは当たり前なのだが、ベルカの空にしては静かだ。
ゴーストアイが新たな敵機を指示した。友軍機を狙っている敵機。
「サイファー、ピクシー！ケツにつかれた！」
「行くぞ、サイファー」
機体を加速させつつ、中距離ミサイル（MRM）を選択する。レディの表示。この距離ならば当たる。イーグルは素早く敵機を捉えた。速度も良い、リリースを押す。
胴体のミサイルが1発、あっという間に機体から離れて行った。外れた際に備えてサイファーが後ろで援護位置に着く。

敵機が左にブレイク。気付くのが遅いか、更に反対にと切り返したところで力尽きた。ミサイルが命中する。
敵機は残り少ない。ガルム隊は編隊を組み直し格闘戦に備える。恐らく捉えた彼らが最後だ。来い。ヘッドオンですれ違い、イーグルの推力に任せ素早く上昇し、ループ機動。単純旋回の敵機の頭上をあっという間に抑える。ピクシーは無意識のうちに武装選択をガンに切り替えた。レーダーでロック、不意打ちを食らったようにたじろぐ敵機が見える。
トリガーを引く。機関砲の曳光弾が煌めき、吸い込まれる。1機の翼をもいだ。ブレイクして逃げる片方の敵機は、サイファーが噛み付いた。どうやらエンジンに当てたようで、よろめきながら離脱していくのが見える。
「片付いたか」
「妙だな。ベルカはもっと繰り出せるはずだ」
これだけの覚悟にしては向かってくる戦闘機が明らかに少ない。やはり気のせいではない。友軍機の損害が殆どないことが物語っている。
「ガルム隊、味方輸送機の到着を待ち、護衛にあたれ」
それでも作戦は作戦だ。連合軍はここで勝った。あの輸送機が飛んでいるのが何よりの証拠だ。識別はウスティオ空軍か。機種はC―17（グローブマスター）。5機が密集隊形で飛んでいる。サイファーとピクシーは輸送機の進路の先で飛ぶようにして合流した。
ピクシーはイーグルのバックミラーが少し明るくなっていることに気が付いた。
「ん？なんだ？」
その光は徐々に増している。空が・・・。
「また空が光った！」
青白い、眩い光が飛んできた。思わず目を瞑る。キャノピーに手を付き、機体をバンクさせながら可能な限り輸送機を見ると、息を？んだ。
機体が赤い線が見える。それも的確に胴体に引かれている。刹那、

輸送機の機首と胴体が切り裂かれている。あれは、溶けたのだ。ピクシーは身が震える。3機が撃墜された。炎上し、積み荷をまき散らしながら自由落下で墜落していく。

空が狭くなる。広かった筈の、決意の空が。